

月例研究会（2025年9月24日）

ケアの政治思想史

——20世紀初頭アメリカにおける
女性、福祉、政治

小野寺 研太

現代日本を含む世界各地でケア問題が深刻化している。ケアの軽視や不足は政治的な問題と考えることができるが、政治思想史においてケア問題への関心は十分とは言えない。今回の月例研究会では、20世紀転換期のアメリカで活躍したジェーン・アダムズ（1860-1935）の政治思想を検討した。アダムズは、セツルメント事業（貧困地域に住み込んで行う社会改善活動）を展開したハルハウスをシカゴで運営し、その後ノーベル平和賞を受賞した人物である。

19世紀後半のアメリカは急激な工業化と移民増加を経験し、劣悪な労働環境、住宅問題、公衆衛生の悪化といった多くの社会問題が顕在化した。「革新主義時代」と呼ばれるこの時代は、多くの社会運動が活発化し、特に高学歴女性や社会貢献に関心のある中間層女性らが多数それに参加した。アダムズが友人と共に1889年に設立したハルハウスは、移民・貧困層が集住する地域できわめて多面的な活動（教育プログラムや文化・芸術活動、社会サービス、アドボカシー、社会調査など）を展開した。アダムズの思想は、この経験から生まれたものである。

アダムズは、『民主主義と社会倫理』（1902年）で民主主義論を展開し、その中で「個人倫理」と「社会倫理」の二項対立を提示している。個人倫理とは、自分や家族といった狭い関係性での正しさであり、各自がこれに固執する

ことで他者と衝突が生じる。重要なのは、この衝突が既存の権力関係を反映するため、一方の「正しさ」が他方に押し付けられることである。これに対して社会倫理は、異なる境遇にある他者を含めて成立する正しさである。アダムズは当時大きな影響力があった進化論に基づき、シカゴの産業化・都市化・移民社会化という環境変化に適応するためには、個人倫理から社会倫理への転換が必要だと論じた。

さらにアダムズは『新しい平和の理想』（1907年）で、米西戦争及び米比戦争という外交政策上の変化を念頭に、米国内にはびこる「軍国主義」、すなわち暴力容認的で他者を統制しようとする精神的傾向を批判した。アダムズが可能性を見出したのは、移民集団や階層を超えて共通するニーズ（生活環境、労働環境、教育、医療など）を充足させ、差異ある人々の生活を基底的に支える取り組みである。彼女はこれを「新しい人道主義」と呼び、新たな国際関係のモデルとして位置づけた。

同時代の著名な哲学者であるジョン・デューイとアダムズは相互に影響を与えあったが、第一次大戦で両者の立場は分かれた。デューイが米国参戦を民主主義拡大の契機として肯定したのに対し、アダムズは人間の基本的ニーズに基づく国際関係構築の重要性を同時代の女性たちに訴えた。アダムズは日常的で経験的な営みに公的な意義を見出す思想を開いたと言える。

アダムズは、進化論という当時の知的資源を創造的に活用しながら、ケア問題の解決を民主主義と平和の根幹に据える思想を開いた。アダムズの事例は、ケア問題に取り組んだ女性たちの思想的意義を問い合わせ、ケアの政治思想史研究の必要性を明らかにしている。

（おのでら・けんた　日本女子大学家政学部准教授／法政大学大原社会問題研究所客員研究員）